

[講演]

異言語間コミュニケーション  
の一方略としての機械翻訳

木村護郎クリストフ

きむら・ごろうくりすとふ

## 1. はじめに

人類は長く、「ことばの壁」で隔てられていましたが、今、機械翻訳の進展で、それが崩壊するといわれるようになりました。ことばの壁の崩壊とともにこれまでのような異言語教育も無用になるという見方もあるようです。言語教育が、大きな転換期にあることは間違いありません。この転換にかかわるすべての観点を扱うことはとうてい不可能ですので、ここでは、異言語間コミュニケーション研究という観点から、今回のシンポジウムの主題である大学の言語教育に焦点をあてたいと思います。

「異言語間コミュニケーション」とは、ことばが異なる人同士のコミュニケーションということです。そのような異言語間コミュニケーションを媒介する言語を扱う意味で、「媒介言語論」と呼んでいます。すなわち、媒介言語論という観点から、大学の言語教育における機械翻訳の可能性について考えてみたいと思います。なお、私は本務校では外国語学部のドイツ語学科に所属しています。英語以外の言語を専門として学ぶ学生を育てる場にかかわってきたことが今日のはなしの背景にあるということを予め申し添えておきます。このシンポジウムの最初の話し手として、基本的なことを確認した上で、いくつかの方向性を提起して、議論の土台ないし手掛かりを提供できればと思います。

はじめに、媒介言語論という視点を確認して、ことばの壁の崩壊の可能性について考えます。その上で、機械翻訳にできることとできないことを整理して、機械翻訳の強みを活かす方法と限界を補う方法を検討し、最後に、今後の言語学習者にいかなるスキルが求められるかということについて考えてみたいと思います。

## 2. 媒介言語論という視点：ことばの壁崩壊の二つのシナリオ

媒介言語論は、異なる言語を話す人々の間を言語的に媒介する方略（ストラテジー）に注目します（表）。機械翻訳はその方略のなかの一つです。媒介言語論の基本命題は、どの方略にもそれぞれ特徴があり、長所短所があるということです。よって、どんな場合においても適切な万能の方略は存在しないということになります。すなわち、一つの方略のみではなく、より多くの方略が使われるほうが、コミュニケーションが豊かになると想定できます。目的や場合によって、それぞれの方略の特徴を活かし、相互補完的に使い分けることが重要となるわけです。機械翻訳についても、単独でとりあげて考察するのではなく、他の諸方略との関係でどう使っていくのがよいかを考えることが課題になります。

はじめに述べたように、人類を長く隔ててきたことばの壁は21世紀中に崩壊するといわれており、それについて二つの予測が立てられています。一つ目は、英語教育がさらに進展して、みな英語を使えるようになるという「英語普遍化シナリオ」です。もう一つは、機械通訳・翻訳技術が進展して、いわばドラえもん「ほんやくコンニャク」が現実化する世界です。これを「機械翻訳普遍化シナリオ」と呼びたいと思います。現在はこれらの二つの方向性が同時進行しているように見えます。ことばの壁は、英語や機械翻訳を使いこなす一定の人々の間では、かつてなく超えやすくなっているといえるでしょう。

しかし私の基本的な考えは、英語学習や機械翻訳の進展によって、これらの二つの方略にのみ過度に頼ることになれば、それは異言語間コミュニケーションの前進ではなく、むしろ後退を意味するだろうというものです（木村2021a: 226）。